

ファゾーン エムの高画質画像が、 診療の迅速化をバックアップ。

患者数の多い大都市の基幹病院で、
超音波装置ファゾーン エムが活躍しています。

導入事例紹介

User's Voice

横浜市立大学付属市民総合医療センター
消化器病センター 担当部長 沼田 和司先生



POINT

- 診療のスピードアップに貢献する高い画像レベル
- 外来・回診・救急に活用できる携帯性
- 汎用性装置としての高い可能性

高度な総合医療を 地域社会に提供するために

東京のベッドタウン、衛星都市として発展してきた神奈川県横浜市。人口は日本の市町村で最も多い約360万人に上り、その数は神奈川県総人口の約40%を占めるなど、同県内においても都市化が進んでいる。この巨大都市横浜において、市内最大の病床数(720床)を有する地域医療の基幹病院が「横浜市立大学付属市民総合医療センター」である。「市民に信頼され愛される病院を創造すること」を理念に掲げ、市民医療に徹した救急医療及び高度専門医療を提供している。外来患者数も一日平均約1900人と膨大。しかもその数はなおも増加傾向にあるという。そのような状況下にある同病院科内において、特に患者数の多い消化器病センターの内科の責任者であり担当部長を務める沼田和司先生に、地域医療への取り組みについてお話を伺った。

「当病院の特色である『専門性の高い医療』を提供し続けることはもちろんですが、増え続ける患者数に対応するためには『診療のさらなる効率化』が求められています。その両方を実現しながら、市民の皆様を長時間お待たせすることなく、高度な医療とホスピタリティを提供していきたいと考えています」

消化器病センターだけを見ても、一日の外来患者数は約190人。さらに入院中の患者さんに加え、入院待ちの患者さんも多く抱えている。より多くの患者さんに、より高度な医療を…。

先生は、地域社会と向き合いながら、勤務医・検査技師・スタッフとともに精励の日々を送っている。



横浜市立大学付属市民総合医療センター外観。
医療センター本館(中央)と高度救命救急センター(右下)

見やすいから、その場で鑑別 スピーディな診療が可能に

ファゾーン エムを消化器病センターに導入したのは、平成19年7月。導入のきっかけとは何だったのだろうか。

「それまで使用していた機器からの性能アップを求めて、ファゾーン エムを導入しました。以前の機器はカラーブロードプレーン能がありませんでしたし、非常に大型だったので使用場所を限定せざるを得ませんでした。診察室によっては、ベッドの脇に入らないこともありました。ファゾーン エムは、画質面でも優れていましたし、スクリーンエンジンを持ち運んで使用することもでき、起動も速い。時間・場所を問わず超音波検査の必要がある当センターのニーズに合致したといえますね」



沼田先生と検査技師の皆様

同センターでは、「外来診療」・「病棟回診」・3次救急医療を行っている「高度救命救急センター」の3カ所でファゾーンエムを活用。ファゾーンエム本体は外来診療室に置き、必要に応じてスキャンエンジンをごカ所へと持ち出している。

「ファゾーンエムを導入したメリットとして、携帯性はもちろんですが、特に画質が優れていることが挙げられます。視認性の高いカラードプラーにより、疾患の検出率は以前に比べ向上しました。ここで重要なのは、『疾患箇所を見つけやすくなった』という事実から得る、いわば二次的なメリットが医師・患者双方にとって非常に大きいものであるということ。それは、『治療方針決定までの時間の短縮』ということ。例えば、嚢胞性病変の場合、ファゾーンエムのカラードプラーにより、水分の貯留と血管病変との鑑別が容易であり、充実性病変の場合では、血流の多寡を観察することが可能です。診断ができれば、次の検査をどうするべきかの方針が立てられ、迅速に最終診断につなげることが出来ます。より速く治療開始まで到達することは、患者さんへの大きなサービスであり、病院の医療レベルを高めることにもつながると考えています。加えて、各々の診療の迅速化は「スピードアップによる治療機会の増大」にもつながります。このことは、多くの患者さんを抱える当病院・当センターにとって、非常に大きなメリットだと思います」

沼田先生のご専門である肝臓がんの場合、迅速な治療方針の決定が患者さんやそのご家族にとって、大きな意味を持つ。「末期がんなど症状が非常に進んでいる患者さんに対しては、こちらで入院するのか、



外来診療室に置かれたファゾーンエム。

もしくはベストサポートケア（緩和医療）へとシフトし、専門の医療機関へと紹介するのがかといった提言を、一秒でも速くお伝えたい。お伝えしなければならぬと考えています。患者さんやご家族にとって、その後の時間がとても貴重であることは言うまでもありませんから」

どうしても救えない命がある。だからこそ、残された時間を生かしたい、ということだろう。近年、先生は超音波診断の重要性を説き、ファゾーンエムの積極的な使用を、若いドクターに勧めているという。

超音波診断と地域医療の未来を見つめて

「今後、超音波診断の有用性・活用領域はさらに拡がると考えています」と先生。「その効果的な使用法の一つに、造影剤を使用した超音波検査が挙げられます。当センターではすでに、肝腫瘍の鑑別、ラジオ治療の穿刺ガイド、TEAやラジオ波の治療効果判定に造影剤を使用した超音波診断を行っています。その有用性・安全性を考えると普及するべきだと思います。そのためには、汎用機による造影エコーの普及が不可欠。ファゾーンエムの今後にも大きな期待を寄せていますよ」と沼田先生は、超音波診断の未来への希望を語り、話を締めました。

同病院の理念にも通じる「最先端の医療を地域社会で活かし、住民に届ける」という考え。先生はそれを超音波診断を含めた専門領域で実現しようとしている。これからもより多くの地域住民に、より高度な医療が提供され続けることだろう。



外来診療室内でも、スペースが狭い場合は、スキャンエンジンを使用している。



スキャンエンジンとともに、病棟回診へ。



病棟回診。ファゾーンエム導入により、回診時にも手軽に超音波診断を行えるようになった。



見やすく鑑別しやすい画像により、病棟でも確かな診断が可能に。



FAZONE M
 超音波診断機
 診察室での検診には「スーパークラート」、ベッドサイドや往診時には「スキャンエンジン」の二通りの使い方ができる超音波診断装置です。